恭賀新年　丸木利陽
生徒一同
謹賀新年　平島及平
旅行ニ付謹年禮　平島及平

時事新報定價
時事新報ハ一年三百六十五日一日モ休刊セズ其代價送料廣告料ハ左ノ如シ
一枚二錢○一箇月前金五十錢○三箇月前金一圓五十錢○六箇月前金三圓
○一箇年前金六圓
○時事新報社ヘ直接ニ郵便ニテ送達スルモノニ限リ右定價ノ外ニ一箇月間ニ付金八錢ノ送料ヲ申受ク
月曜日、大祭祝日の翌日并に歲末年賀等軸の新聞紙休刊の日のみに時事新報の配達區一ヶ月前金九錢なり但し郵便配達の地方は此外一枚に付一錢を申受ク
時事新報廣告料前金

一行廿四字詰五號活字	一行二付一日限	一行二付二日以上	一行二付七日以上	一行二付十五日以上	一行二付十六日以上
自一行至十行	十錢	八錢	七錢	六錢	五錢
自十一行至廿行	九錢	七錢	六錢	五錢	四錢
廿一行以上	八錢	六錢	五錢	四錢	三錢

時事新報廣告料前金
一行廿四字詰五號活字　一日限　二日以上　七日以上　十五日以上　十六日以上
自一行至十行　十錢　八錢　七錢　六錢　五錢
自十一行至廿行　九錢　七錢　六錢　五錢　四錢
廿一行以上　八錢　六錢　五錢　四錢　三錢

時事新報

政談一時間の始末

政談の本色は私利私欲を圖るに非ずして公共の爲めゝ政治の得失を論議するものあれば事柄より公正不偏なるべき筈なれども其所謂公共の利益を圖りて見事ゝ議論を實行するに至るときは直ちゝ自身の功名手柄となり人心を收め興望を博するゝ足るべくして即ち人情の最も愛し易き所なれば是に於てか政談の本色は一變して面各爭利の色を帶び之を欲するの情ますゝ熾なるに從ひ往々ろの本を忘れて末に走り自說を主張するの熱心はいよゝ其熱度を高うして遂に互に相爭ふに至るべきの之を轉じて政熱とは云ふ政熱の發して形に顯はるゝや千萬百樣一概ゝ非難す可らずと雖も多くは事の極端に走りて其弊に陷るを免れ難きは亦是れ人事不如意の一端として見る可きのみ顧ふに日本にて政論の發端は最近十數年の間にありて日其尤淺きが故に其品格未だ高尚ならざると共に政熱の度は割合に高く別して近來各地方にては其氣焰中々熾にして或は官民の不調和に基くといふもあり黨派の軋轢ゝ由るといふもあれども其熱の沸騰は則ち一ゝして殊更ゝ怪むべきものに非ずと雖ども此事さるや獨り我國のみに限らず西洋に於ても事例を見ること少からず即ち愛に掲出したる政論ゝ刊行したる某雜誌中の漫畫にして一時間を十分宛に別ち其間に政論家が次第〳〵に氣色を變ずる其順序を描きたるものにて最初は互に莞爾として相迎へ至て和熱の體あれども二十分より三十分と經過すれば追々議論ゝ熱度を加へ内に書ふるの憤怒は漸く外に顯はれて目を見張り腕を擲し果は掴合とまでに推移りて最後に至れば揉て剔したる私欲公益も共ゝ一轉地ゝ塗れて雙方共に俗ゝ所謂此蛙取らずの奇觀を呈するに終るとあり政熱既ゝ此邊に達するときは當局者も始めて思當るべき因合なれども唯事の既に六蒲十菊に屬するを如何せんや竊ゝ我國の前途を察するに明二十三年には國會を開設して國の法律を議定するにも全國代議士の評議に任せ下りて府縣郡市町村までも一切萬事會議の世の中となるとなれば之と共ゝ黨派の形も判然として現はれ卵化して鵜となれば政論の聲々中々ゝ喧しく其多事ゝして紛擾に流るゝと今より想像に餘りありと云ふべし是れも時勢の變遷あれば容易に個めて駐びきに非されども一兆を進めて其原因ゝ遡り政熱沸騰の玆に到る其所以を尋ぬれば畢竟するに世の政論家が自尊自重の大義を知らざるに坐すと云ふて可おらんか蓋し自ら其品格を種持せんと欲するものは譏んで他を傷くることを爲さる理の順序なれども往々然る能はずして議論の極、罵詈讒謗ゝ亘ると多く同時に自身の面目を抛棄して心中最早や前後を顧るの餘地を殘さゝるとあれば扨みを漫畫に見ゆる樣の始末とあり て波瀾の動搖徒に泡沫となるゝ過ぎざるものあり右の次第なるを以て政論家その人の私利私欲の成敗は兎も角も之ゝよりて民利國益を犠牲にするとありては只に眼を過ぐるの雲煙とのみ看過す可きゝも非されば議論も適度に其熱を收め互ゝ自尊自重の大義を心に念じて將來に戒むる所あらんと我輩の切ゝ望む所あり

政談一時間の始末

第十分

第二十分

第廿五分

第三十分

第三十五分

第四十分

第四十五分

第五十分

第五十五分

第六十分

雜報

○高千穂艦　常備艦隊の旗艦なる高千穂艦は已ゝ去月十七日を以て長崎港ゝ發錨せしが物ゝ昨年中同地の造船所に入渠して修繕を加ふべき筈定なりしも都合ゝ依り本年の春季まで延期する事となり目下造船所員が日々出張して修繕の箇所を取調中なりと

○縣廳の移轉を準ひ　福井縣廳の所在地なる福井は越前の北部ゝ偏して國井、足羽、吉田、大野の四郡には便利なれども他の七郡ゝは不便利なればとて聚てより若狭三郡の如きは殊更縣に屬せんことを願み居る有樣なりしが近日ゝ至て其生或は敦賀ゝ遷轉せんと願ひもの多く內務大臣ゝ建議せんとなり

○歐洲の近事　獨逸墺三帝會合の論　露國の兩皇は獨帝訪問の返禮として近日伯林に赴く由なれば獨帝は兩者が同時に伯林ゝ來遊して三帝相會し交情を密ならしめんと希望すれども墺帝は露國が墺國の境上に配置せる軍兵を引去るにあらざれば露帝ゝ接せずと決心せるが故獨帝は露帝に軍兵を引上げ歐洲の平和を謀るの得策なるを勸告し三帝會合の利益を述べゝと云へり

佛獨境上の爭論　過日佛國の軍夫三名佛獨境界の近傍を消遙せし折柄一匹の鹿、林中を走るを見てければ共に銃を揃へて放發せしゝ鹿は銃傷ゝ屆せず走て獨逸の領內に入りしかば佛の獵夫は之を追ふて兩國の境界線を踰ゆるや否や獨の監察官吏聽せ來りて軍夫を捕縛したりと

露國の軍備　露國政府が西境ゝ屯在せる軍兵の組織を改革せし故獨墺の兩國は大ゝ憂慮する所あるが如し又露國は不日兵士三萬と大砲七百門を墺、獨の境ゝ送致し更ゝ來年三月同地に大軍を送る計畫なれば伯林の兵事新聞は露の舉動を論難せり

墺國守兵と撤す　墺國政府は從來ボヘミア、モラヴヰアの境に屯在せしめし兵士を引上げて獨逸と無窮の和親を固むるの意を表しゝさりと

丁抹王の在位廿五年祭　丁抹王は十一月十五日首都コッペンヘーゲンに於て在位廿五年の祝祭を行ひしかば諸國の君主及び使臣は皆參賀したり當日來會せし人々の中ゝ英國皇太子、露國皇太子、獨逸皇弟ハインリヒ親王等もありたり（十一月十六日倫敦支那エキスプレッス）

○バーミンハムの演說　グラットストーン氏が先頃バーミンハムゝ於て大演說をなせし次第は既ゝ本紙上に記せしが老て益々壯なる氏の雄辯は相變らず滔々として大に聽衆を感起せしも其論點に至りては別に是ぞと云ふ新出色のものなく是迄何百回となく論じ去り論じ來りたるものゝみなりしかば保守黨の諸新聞は人皆バーミンハムに於るグラットストーン氏の演說を持て囃せど彼れ果して何程の價値あるやなど述べ立てゝ何れも輕侮の色を現はし自由黨の新聞は之に答へてグ氏の遺義ゝ厚く自ら信じて疑はざるの一事は其演說ゝ光輝を添へ活氣を與へ氏が胸中に燃え立てる心火を聽衆に分つゝ足るものなりと云へるよし

○木原檢事　此程控訴院評定官より檢事ゝ轉じたる木原章六氏は長崎控訴院在勤を命ぜられ來る十日頃出發赴任するよしなり

○古澤農商務書記官　が群馬縣へ出張を命ぜられ去る廿九日東京を出發せし用向は目下井上大臣が磯部の別莊に於て同省の改革事務を取調中の件に關しての事なりと

○吉田領事　英國倫敦在勤を命ぜられたる吉田領事は本月中旬を以て出發赴任するよし

○東京灣浚渫工事　東京灣の浮筋浚渫工事は日本土木會社が受負ふて起工する事となり兼て其準備中なりしが愈々本月上旬より浚泥船二隻を以て浚渫に着手するよし尤も該工事ゝは鉱稿の人夫を要するを以て石川縣監獄分署と制定して在監人をも使役する筈なりと

○橫濱郵便局信付けの馬車　橫濱港にて郵便物を陸上げしてより郵便局ゝ送達する手續は如何にも緩慢にして只人夫と荷車とに依賴しゝる事なるが斯ては隨て時間ゝ手後れとなるゝみゝ少からざるに付此度同港上野下の馬車の製造中なりと云ふ

○府下物產共進會　據て深瀨具一氏外數名の發起にて府下物產の改良進步を圖らんが爲め東京府管下の米麥蠶繭其他の物產共進會を開らんとて屢々實見會に於て會員會員わりじめ圖地內大日本農會の通信員に取扱ひたる會員の質問は百

○農會の通信員の質問　

○内閣官報局　

○陸軍省　

○東京日本橋通二丁目小林新兵衛○同三丁目丸善○同京橋區銀座四丁目博聞社●●●●●●●●

病氣療養中ゝ付新聞紙上ゝて新年の祝詞申納候

根津神泉亭　那須武八

病中ニ付年賀御斷　緒方惟堯

社務多忙に付年賀謹新紙を以て新年の祝詞申述候

時事新報社　木下立安

末延道成

年賀ノ禮ヲ缺ク

十二月

狹三郡の如きは殊更縣に屬せんことを願み居る有樣なりしが近日ゝ至て其生或は敦賀ゝ遷轉せんと願ひもの多く內務大臣ゝ建議せんとなり

○歐洲の近事　獨墺三帝會合の論　露國の兩皇は獨帝訪問の返禮として近日伯林に赴く由なれば獨帝は兩者が同時に伯林ゝ來遊して三帝相會し交情を密ならしめんと希望すれども墺帝は露國が墺國の境上に配置せ

十二月

一日　アビシニア王の靈力せしむ○

四日　佛國動物園の女婿ウィルソン

五日　亞弗利加

六日　內閣書記官長

隆平兩氏元老院

七日　獨逸墺三帝會合

八日　御料地

堤正誼氏御料地

九日　獨逸墺三帝會合

十日　聖上

十二日　病中

逸帝兼普墺

十四日　露國

十六日　獨逸

十七日　本

式を行ふ

佛國の武器

十八日　大坂

獨逸墺

十九日　勅令

十一萬二千

十年度の

十一萬二千

宮崎縣

廿一日　宮崎

中の閉會

二十二日　

大坂兵庫行

瀨戸內行

尾張伊勢行

○明治二十

三

一日　アビシニア王の靈力せしむ○

四日　佛國動物園の女婿ウィルソン

五日　亞弗利加

六日　內閣書記官長

隆平兩氏元老院

七日　獨逸墺三帝會合

八日　御料地

堤正誼氏御料地

九日　獨逸墺三帝會合

十日　聖上

十二日　病中

逸帝兼普墺

十四日　露國

十六日　獨逸

十七日　本

式を行ふ

佛國の武器

十八日　大坂

獨逸墺

十九日　勅令

十一萬二千

十年度の

十一萬二千

宮崎縣

廿一日　宮崎

中の閉會

二十二日　

○七嶋廷の販賣元にて同縣

七八九の三箇

○印度婦人生館の演說を

跡問したるよ

晩餐を供して

○青宿學生相

學一般ゝ通達

○尚武會

○美術展覽會

○陸軍省

○東京日本橋通二丁目小林新兵衛○同三丁目丸善○同京橋區銀座四丁目博聞社●●●●●●●●